

# 職業作家・松本清張の出版

——全集未収録小説「女に憑かれた男」、「溪流」を読む

石 川 巧

## 一 はじめに

昭和三十一年五月三十一日付で朝日新聞社を依願退職した松本清張は、文筆専門に転じると同時に猛烈な勢いで小説を量産し、作家としての地位を固めていく。折からの大衆小説・中間小説ブーム、週刊誌ブームが追い風となり、この年の清張は「新潮」「文学界」といった文芸誌、「サンデー毎日」「週刊朝日別冊」「週刊新潮」「週刊読売」などの週刊誌、「婦人朝日」「文藝春秋」「キング」などの総合雑誌、そして、「オール読物」「講談倶楽部」「小説新潮」「小説公園」「オール小説」といった大衆文芸雑誌まで幅広い媒体に短篇小説を発表している。また、それと併行して初の新聞

連載小説「野盗伝奇」（共同通信扱い、「西日本スポーツ」5月17日～9月9日）に取り組み、時代小説からミステリーや通俗読物まで、ありとあらゆるジャンルを横断することによって、意識的に作家としての幅を拡げようとしている。職業作家としての生活を選んだ清張は、依頼された仕事を次々と引き受けることで収入と知名度をあげるとともに、作家としての構想力、執筆力を鍛錬しようとしたのであろう。

「女に憑かれた男」（昭和31年6月）、「溪流」（昭和31年9月）は、いずれもその時期に書かれた短篇小説である。だが、掲載誌の「小説春秋」が著名作品の再録を中心とする大衆文芸雑誌だったため、これまで存在そのものが知られ

ておらず、全集その他の単行本にも収録されていない<sup>2</sup>。

——ここでは、そうした特異性をふまえて二作品の内容を明らかにするとともに、それぞれが職業作家として出発したばかりの松本清張にとってどのような意味をもっていたのかを検討する。

## 二 「女に憑かれた男」を読む

「女に憑かれた男」は、いく先々で女に言い寄られる男の数奇な運命を描いた小説である。全体は、第一章「検事調書（昭和二十四年五月）」、第二章「警察調書（昭和二十八年十一月）」、第三章「供述書（昭和三十年六月）」から構成されており、六年余りに及ぶ主人公の女遍歴が、担当検事、係官、警察官の訊問とそれに対する応答というかたちで記述されている。また、作品のラストシーンには、ダイナマイト爆発によって重傷を負った主人公が今際の際に何かを言いかけて亡くなる場面が用意されており、短篇小説としての完結性を期待して作品を読み進めてきた読者を意図的にはぐらかす仕掛けが施されている。この作品は、時間をかけて練りあげられた秀作とはいえないし、対話形式が有効に機能しているともいえないが、清張は、敢えてこうした作り込み、創作実験とでもいえるような手法を試み

ているのである。

第一章の冒頭に登場する主人公の「私」（＝藤川晃一）は二三歳の大学生。間借先を追い立てられて困っていたところ、級友の紹介で姉の嫁ぎ先である安岡茂太郎宅の離れに下宿することになる。ところが、姉・好子は、勉学にいいしむ「私」を甲斐甲斐しく世話しているうち「へんに粘っこい」視線を向けるようになる。世間から「非常に家庭的で、おとなしく、無口で、むしろ平凡すぎる位、温和な性格だ」といわれている好子のなかに欲情する女の素顔を認めた「私」は、ひとの良い茂太郎を裏切ることを恐れながらも二人きりでの親密な会話を重ね、やがて気持ちの動揺を隠せなくなる。

こうして、二人は「いつ踏み込んでもよい雰囲気になりながら危く見送っている状態」に陥る。のちに供述のなかで「心理的な前戯」と語っているように、それは貞操意識にもとづく自制というよりも、お互いが焦らし合いのなかで昂奮を高めていくような遊戯だった。背徳意識が強ければつよいほどその関係に魅了されてしまう甘い罠だった。

興味深いのは、二人の性愛が後の清張作品では考えられないほど執拗かつ生々しく語られており、特に、男の欲情をほとんど捨象して女のそれに焦点が当てられていること

である。たとえば、二人が初めて一線を越えてしまう場面は、

——いきなり私は両手で眼かくしされました。私はその手を除けようと握ると、強い握力が私の手を包みしました。それから彼女の腕が私の頸の下に入り、私は彼女と重なつてうしろに引き倒されてしまいました。仆れると好子の顔は私の顔の上におしかぶさつてきて、口、鼻、眼耳のいたるところが、彼女の唾液でべたべたになりました。「晃ちゃん、好きだったのよ好きだったのよ」と、好子は言いつづけました。それから母親が赤ん坊を添乳するような格好で私を抱き込み、私の指を握つて自分のはだけた着物の間に引き込みました。それは逡巡のない厚顔な行為でした。

と描写されており、行為の主体はすべて好子になっている。「母親が赤ん坊を添乳するような格好で私を抱き込み」という表現が如実に示すように、「私」は自分を受動的な立場に置き、まるで好子の欲望の捌け口として利用された被害者であるかのように語るのである。

こうした語り口は供述が進むにつれてさらに露骨さを増

し、「安岡さんが出動したあとの朝のひとつきでも、好子は私の寝ている蒲団のなかに入ってくるのでした。一たんそういうことになる、好子の身体は、若い私の身体に酔つてしまうのか、二時間くらいは起き上れないのです。私たちは、朝でも、昼間でも、夜でも、随時に関係しました」「十も年齢の違う好子から、こんなに執拗に愛撫されるのは、私が美男なのでは無く、私の身体の若さが好子を満足させるのだと思つていました」というように、「私」の若い身体を貪る女のイメージが反復される。

また、「……こんな感じ、若い女の子には解らないかも知れないわね」というのです。いうまでもなく最後の言葉は、夫婦生活や、それと同じ体験を経た女にだけ解るという意味です」といった供述がなされるに及んで、話題は姦通による倫理の逸脱というテーマを置き去りにし、長く夫婦生活を続けた女にしかわからない性の悦楽という問題系へと移っていく。ここでの清張は、事件の真相を明らかにすることよりも、弄ばれた男の側から「多淫性な女のSexualな興味」を語らせることに注意を払い、夫婦生活における性の抑圧と抑圧のなかで醸成される淫乱さを同時に捕捉しようとしているのである。

はじめ、夫の安岡への呵責があつて大胆な行動に踏み切

れずにいた「私」も、やがて好子の熟れた肉体の虜となり、関係を断ちきれないままズルズルとつながっていく。好子はますます執拗になり、「若い女と遊んでいるのではないか」と嫉妬するようになる。「私」はここで、「自分に対して前ほどの情熱がなくなつたが何故か、とかいつて、こゝでは耻しくて申上げられないような方法で、その「情熱」を測つたりして、いろいろ穿鑿するのです」という供述をしているが、これは恐らく、「私」が排出した精液の量を確かめて他の女と関係していかどうかを見極めたということであろう。ここでの清張は、わざわざ読者を困惑させるように淫靡な表現を選び、若い男の身体をむさぼる女を下卑た存在として表象しようとしているのである。

そんなある日、好子は「夫へ対する義理と、あなたへの愛情との悩みで生きているのが苦しくなつた、どうか一しよに死んでくれ」と言いだし、心中という行為に「Sexualな満足を覚え」ているような素振りをみせる。「私」もまた、そんな好子の要求から「脱れられないような、運命的な気持」になつて心中を承諾してしまう。清張はここでも事に及ぶ過程を執拗に描写する。

——私は薬を嚙もうといったのですが、好子は首をし

めてくれと言うのです。私の手で縊られながら死にたいと言うのです、それも二人の身体が密着したまゝやつてくれと言いました。私はその要求の通りにしてやることにしました。最後の行為のとき、私は好子の頸を締めました。もつと強く、強く、と求めるのでその通りにしました。鼻翼で呼吸し、齒の間から声を洩らし、苦痛と陶酔に抵抗するように四肢を踏張つて身体を反るようにしていましたがやがて仮死の状態になりました。

この場面には、昭和十一年五月に起こつた阿部定事件の影響が垣間見える。待合茶屋で愛人・石田吉蔵を絞殺し、相手の男性器を切断して逃亡するという猟奇的事件を引き起こした阿部定は、事件直後はもちろん逮捕後も、「妖婦」として盛んにマスコミに取りあげられることになる。また、戦後にエログロブームがおとずれると、カストリ雑誌などの題材としてブームが再熱し、殺人ならびに死体損壊罪の刑期を終えていた阿部定（昭和16年5月に皇紀二六〇〇年の恩赦で出所）の言動はもちろん、その色情遍歴を綴った暴露本として、冬木健『愛欲に泣きぬれる女あべさだの辿つた半生』（昭和22年、国際書房）、木村一郎『昭和

好色一代お定色ざんげ』（昭和22年、石神井書店）、鮎橋正一『阿部定行状記』（昭和22年、紅書房）などが次々に出版される。

出所後、偽名で生活し、サラリーマンとの事実婚を果していた阿部定は、こうした再ブームによってその素性が知られるところとなる。自分の妻が阿部定だと知った夫は失踪し、彼女自身も世間から好奇の目にさらされる。本名を名乗って生きることを覚悟した阿部定は、無頼派の寵児として人気を博していた坂口安吾との対談（座談）昭和22年12月・文藝春秋新社）に臨むなどして自ら事件の経緯を語り、『阿部定手記愛の半生』（昭和23年、新橋書房）を出版する。

さらに、事件直後から地下出版のかたちで出回っていた阿部定事件の予審調書<sup>4</sup>も人口に膾炙するようになり、世間の阿部定に対する関心はエスカレートしていく。そこには、愛人・石田吉蔵とのあいだで繰り広げられた性交渉の様子が赤裸々に綴られており、「女に憑かれた男」の文体に影響を与えたであろうことがさまざまな記述から類推できる。たとえばこの調書には、

答（前略）石田が私に「お前は俺が眠ったらまた絞め

るのだろうね、絞めるなら途中で手を放すなよ、絞められる時は判らないが放すと苦しいからね」と云いましたが、それは冗談に云ったのだと思っています。

問 それはなぜか

答 それは以前、石田の頸を絞めながら関係をすると感じが良いと話したことがありました。五月十六日の晩、私が石田の上に乗る、初めは手で石田の咽喉を押すように関係しましたが、手では少しも感じが出ないので、私の腰紐を石田の頸に巻き、私がそれを絞めたり緩めたりして関係しているうち、下のところばかり見ていたため力が入り過ぎ、石田が「ウー」とうなり、局部が急に小さくなったので、私は驚いて紐を放しました。／そのため、石田の顔が赤くなつて治らないので、翌日まで水で顔を冷しておりました。そんなことがあったため、十八日の午前一時頃、石田が眠る時、私に先程のように絞めるなら途中で放すななどと云ったのですが、私はそう云われた瞬間、自分に殺されても恨まないというのかなと考えました。

といった記述があり、密室の変態的行為までもが言説化されているのである。

こうして、阿部定はたんなる色情狂ではなく、ひとりの女として純粹に性の悦楽を求め続けた純粹精神の持ち主として偶像化される。自らがオルガスムに達する際、男の頸を絞めて呼吸を止めると性器が固くなって気持ちが悪かったと語る女の登場は、同時代の文学にも大きな示唆を与え、やがて大島渚の映画『愛のコリーダ』（昭和51年公開、監督・大島渚）に結実していく。

職業作家としてのデビューを果たした松本清張が、検事・警察の調書や供述書という体裁で「女に憑かれた男」を書き、「最後の行為」の際に「二人の身体が密着したまゝ」「首をしめてくれ」と要求する女を描いた理由は恐らくそこにある。調書に刻まれた供述の逼真性に興味をもった清張は、阿部定をひとつの踏み台として、夫婦生活のなかで性的快楽に目覚めながら妻であることの倫理に縛られ、それを抑制せざるをえない状況に陥っている女の性欲を直視しようとしたのである。

ちょうど、清張が「女に憑かれた男」を発表する直前の昭和三〇年に、当時「チョン切り美人」とよばれていた阿部定を取材した広岡敬一は、そのときのことを、「どうせ、

あの話でしょ。困っちゃう」／東京の下町言葉だ。困惑した表情で私を迎えたが、流し笑いが背筋をくすぐるほど色っぽい。年齢を超えて女盛りを思わせ、いまなお現役を僥はせる。「みなさん同じことばかりじゃ申し訳ないものね。違ってお話をするわ。私は色に狂ってるの。あの人を殺したいほど好きだけど、弾みであんなことになっちゃった。アノ最中に相手の首を絞めるとアソコが固くなって、続けて三回も……。気持ちがいいのよ」／仕方話で、彼女は両手を伸ばし私の首に指を回す。憑かれたような彼女の目付きに、思わずその手を払いのけた」（『戦後性風俗体系わが女神たち』平成12年、朝日出版社）と記しているが、ここに「憑かれたような」という表現が用いられていることには留意してよいだろう。

事件から四年半後の第二章、好子との心中事件によって囑託殺人罪に問われ、二年八カ月の服役を終えた「私」は、活版印刷の職工として働く。そして、ここでも第一章と同じように経営者の姪・久子と出遭い、再び女から言い寄られる。「旧制の女専出」という学歴をもっていないがら、離婚して叔父のもとに身を寄せて片身の狭い思いをしていた久子は、かつて、大学生でありながら、人妻との心中を企てて自分だけ生き残った男の「秘密をひとりで知つてい

る」ことに興奮を覚え、「私」に急接近するのである。

「私」の過去を執拗に聞きたがるようになっていく久子について、「私」自身は、「一度結婚したことのある彼女にとつては、私の経験談が案外な刺戟だったようです。それで私は死んだ女との情事を話してやりますと、「可哀想なことをしたのね」とか、「いやらしいわね」とか言いながら、呼吸をはずませながら、いくらでも聞きたがるのです」と供述している。そこには、好子との情事を訊きだすことで「一種の興奮状態」に陥る久子の姿が前景化されている。

ここで清張は、二人が関係をもつに至った夜、暗闇のなかでひとり言のように「恥しいわ」と呟いた女の媚態に焦点をあて、すべての出来事はあらかじめ久子によって企まれた誘惑だったかのように語る。さらに、ここで特にきめ細かく描写されるのは、出戻りとして刺激のない生活を送っていた久子のなから色情が溢れだしてくる瞬間である。清張が問題にしているのは、年上の女と若い男が愛欲にまみれていく様子や、男を誑し込もうとする悪女の素顔といった表層的なものではなく、一度は夫婦生活のなかで性交渉を常態化させていたのに、倦怠や別離によって性的な飢餓状況に置かれることになった女の呻きそのものなのである。

好子と「私」が心中するに至った経緯を模倣することで興奮を高めてきた久子は、やがて、自身の物語を完結させるために自分と心中してくれとせがむようになる。「私」にしてみれば、夫のいる好子と違って久子との関係を継続するのに不都合な事情はどこにもないはずである。だが、すでに「運命的な絶望」を感じはじめていた「私」は、またしても女のわがままに従い睡眠薬という方法を選ぶ。

——静かな太陽の光の下で、秋の草が一ぱいに生えていました。その中に横たわつて最後の行為をしました。／「もう後悔はないわ。うれしいわ」と女は言い、身づくろいすると、私の腕の中に身体を凭りかけ、顔を仰向けしました。「薬をのませて！」と久子は眼を瞑つて、口を幼児のように開けました。

ここに至るまで、久子と「私」のあいだにはお互いを知り合おうとする会話がほとんどない。学歴に関する情報を除いて、唯一読者に提供されているのは、久子が同人雑誌に詩を書いており、それを「私」が下手糞だと評したことが「彼女の気持をぐつと近づけ」るきっかけになったというエピソードくらいである。だから、死の間際においても

二人は性交渉以外に語り合うべきことが何もない。久子と「私」は、それなりの学歴と知性を備えた人物として造形されているにもかかわらず、言葉による相互交渉というものをほとんど機能させようとしないのである。その意味で、「女に憑かれた男」という作品の根底には、肉体関係にのめり込むにつれて意志を疎通させるための言葉が壊死していくような構造がある。

結局、二度目の心中も久子だけが死んで自分ひとり生き残るかたちで未遂に終る。自棄になった「私」は、警察の治安もないダム建設の工事現場に入り、飯場での暮らしをはじめ。ここまでくると、多くの読者は、次に取り憑いてくるのはどんな女なのだろうかという興味をもって作品を読み進めることになるだろうが、第三章における清張は、逆に細かい背景や文脈を無視し、事の次第のみを手短かに記述する方法を採る。

○孝造の妻のみつえとは、いつから仲よくなつたのか。  
——四月ごろからです。

○みつえの方が、お前よりずっと年齢が上ではないか。十二くらい上だな。

——私が、工事場でけがをして休んでいたときに、親切にしてくれたからです。

○では、みつえの方からお前に仲よくしてきたのだな。

——はあ。

「私」とみつえとの関係は「仲よくなつた」、「仲よくしてきた」といった表現ですべてが了解可能になるほど短絡的なものになり下がっていくのである。

妻が自分のもとで働いている若い男との情事に耽つていることに激昂した夫・孝造は、「氣狂いのようになつて」自分たちを縛りあげ、隧道のなかに押し込めたままダイナマイトで殺そうとするが、そんな緊迫した状況のなかですら、「私」は命乞いをせず、「もう死んでもよい」と観念する。自分の名前を呼び続けるみつえに応じることもなく、黙って導火線を這う火を見つめていたと供述する。そして迎えたラストシーン。訊問する警察官と「私」の遣り取りは以下のように描かれる。

○お前は学校教育をうけたことがあるか。  
——無言。

○何か言うことはないか。

——ありません。たゞ……。

○たゞ？ 何だ？

——いや、もう、いゝです。私にも分りません。休ませて下さい。

（註。三時間後に藤川晃一は死亡）（了）

ここで警察官が口にする「お前は学校教育をうけたことがあるか」という言葉は、いかにも唐突にみえる。また、そのあとの「何か言うことはないか」という問いに対する「ありません。たゞ……」、「いや、もう、いゝです。私にも分りません。休ませて下さい」という返答も、果たして「私」は何を言わんとしていたのだろう、という憶測を虚しく喚起する。ダイナマイト爆発で重傷を負い呼吸さえ困難な状況にある「私」に対して、警察官はなぜそんなことを尋ねるのか？ 清張はなぜ読者に消化不良を起こさせるような閉じ方をしたのか？ そのような疑念が後味の悪いざらつきとして残るのである。作品には、久子との関係に疲れていく「私」の内面を「ざらざらとした渴いた気持」と表現する場面があるが、それは作品の読後感そのものでもある。

### 三 「溪流」を読む

掲載雑誌である「小説春秋」のタイトル脇に付された「運命の波に翻弄される若き美学者は何故山峡の宿の一人娘の前で文盲を装い、死をえらばねばならなかったか？」というキャプションからも明らかのように、「溪流」は、人妻との道ならぬ恋に破れた田村（「彼」）が自分の素性を隠して山峡の温泉旅館で働くうちに、宿の娘・多美子から好意を寄せられるようになるものの、寂寥感に堪えられず自殺してしまう話である。

作品は「昭和二十年の秋」に「R県の足立温泉」で起こったバス事故から語り始められる。「即死者一名。病院に収容されて死ぬ者一名、重軽傷二十数名」という大事故の直後、警察は病院に収容された負傷者の調査を行うのだが、そのなかにひとりだけ身許がわからない青年がいた。本人が昏睡しているうえ荷物らしいものもないため、警察は他の負傷者たちにこの青年のことを尋ね回る。

捜査のかいあって、青年には「二十七、八の洋装の似合う美しい女の人」が同伴していたことがわかる。この女はなぜ青年の傍に寄り添うこともなく姿を消してしまったのか？ 二人は「行きずりの間」に過ぎなかったのか？「溪流」

もまた、「女に憑かれた男」と同じように謎の提示とともに始まる。

冒頭場面で偶然に自動車事故が起こり、それによって主人公たちの運命が狂っていく展開といえ、菊池寛「真珠夫人」(大阪毎日新聞)、「東京日日新聞」大正9年6月9日(12月20日)が有名であり、清張自身も「溪流」と同じ時期に発表した「箱根心中」(婦人朝日 昭和31年5月)でそれを模倣しているが、この作品の冒頭も、恐らくは「真珠夫人」にヒントを得て構想されたものであろう。

事故から二日目に昏睡から覚めた青年は、女が自分を見棄てていなくなったことに「驚愕とも、呆然ともつかぬ顔」をし、見舞いにきたバス会社の使いに「この近辺で働く口があつたらお世話して下さい」と頼み込む。自分を置いて消えた女のことは、「それほどの深い知り合いではないんです」といって口を濁す。

また、この青年は自分の境遇について、「もともと日雇いの労働をしてきた男です」、「小学校三年までしか行っていないので、文字の読み書きがあまりできません」と述べ、素性を隠そうとする。語り手は、そんな「彼」が「ややくぼんだ眼窩に、澄んだ、美しい眼」をもっていて、表情にもどこか「都会的な知性」が感じられると指摘しているが、

それは後半での意外な展開に効果を与えようとする清張の伏線と考えてよいだろう。

田村と名乗るその青年は、旅館での働きもまじめで誠実だった。とくに気を利かせようとして機敏に動いたりするわけではないが、客に対しては微笑を忘れず、他の雇人のように博打にうつつをぬかすこともなかった。東京の洋裁学院を卒業して実家に戻っていた宿の娘・多美子は、そんな田村を眺めているうちに、「いつも何か思考をひとりで追っているような孤独な姿」、「孤独ながら、他人の容喙を許さぬようなきびしさ」を漂わせ、「厳肅な思索」を他から邪魔されたくないと身構えている様子が気になりはじめる。読み書きができないのは個人の能力の問題ではなく「不幸な境遇」に育ったからではないか、孤独の原因は「本を読む喜び」を知らないからではないかと考える。こうしたおせっかいによって「彼」は漠々を机に向かうのだが、長くは続かず多美子を失望させる。

そんなあるとき、多美子は客が忘れていったアメリカの写真雑誌「ライフ」を「眩しそうな顔付」で読んでいる田村を目撃する。本人は写真を見ていただけと言って部屋を出ていくが、残された多美子は、それが英文の記事で、「細かい活字」ばかりがベタ組みされているページだった

ことを知る。語り手は、ここで彼女の心のなかに「田村への深い関心が水のように侵みひろがった」と記す。多美子は、田村という男の背後に広がる深い闇、および、無学だと語る彼のなから滲み出ている知性のギャップに心を奪われていくのである。

こうして迎えた作品の後半は、東京から来た三人の泊まり客が、田村の姿をみかけて「瀬木君」と呼びかける場面からはじまる。彼は東京のR大学で美学を講じ、研究者としての将来を囑望されていた瀬木恭助という新進学者だったのである。知人の口から「学界でも注目されている秀才なんです、一年前から急に行方を絶っていたのです」と聞かされた多美子はみるみる蒼ざめ、呼吸さえ止まりそうになる。

「暫く。一体、どうしたんだ、瀬木君。急に行方不明になつたりしてさ、どんな事情か、聞くこうではないか。君のような優秀な学徒を失つて、先生がどんなに心配してられるか」／「先生」／が瀬木と呼ばれた田村は眼を伏せた。／「うむ、先生の心配は一通りではない。俺の学問をうけついで発展させてくれるのは瀬木だと思つていたのに、黙つて失踪する奴があるかとも

怒つて居られた。おい瀬木君。どんな事情があるか知らないが、僕たちと一緒に帰つてくれ。先生がどんなにお喜びになるか。奥さんもたいそう心配してられる」／「奥さんが？」／俯いていた瀬木の顔が、つと上がると、友人の顔を正面に見つめた。／「奥さんが、奥さんが、僕のことを心配しているというのか？」／「そうだ、いつも君のことを口に出して心配している。どうしたんだ、君」／「いや」／と瀬木は泪を溜めて睨みつけていた眼を友人から外らした。

ここには、泉鏡花『婦系図』<sup>8</sup>やスタンダール『赤と黒』<sup>9</sup>といった古典的名作との類似性、あるいは、当時、係争中だったチャタレイ裁判<sup>10</sup>で、猥褻表現や言論の自由をめぐる闘争とは別の次元で人々の関心を集めた、姦通との接点が見え隠れしている。

「先生」の庇護を受けていた「優秀な学徒」が自らの引き起こした恋愛スキャンダルがもとで研究を棄てて行方をくまますという展開は、まさに『婦系図』そのものである。また、その相手が「先生」の「奥さん」であるという設定は、貧しい生まれのジュリアンが小都市のレナール家の家庭教師となり、卓越したラテン語の能力と美貌をもって上

流社会に認められようとするものの、そこで出遭ったレナル夫人との恋に落ち、やがて夫人の前から姿を消して神学校に行くことになる『赤と黒』の世界に類似している。もちろん、清張はそれらの名作を安直に模倣しているわけではなく、様々な物語の骨格を自在に組み合わせているのだろうが、上記二作に関しては、それが読者の共通認識を喚起するであろうと思われる点において、換骨奪胎を意識した戦略を感じるのである。

こうして周囲に素性を知られてしまった瀬木（＝田村）は、多美子に遺書を宛ててあつさりと自殺する。遺書のかで「ある動機から、急にその学問するということに懷疑をもつようになりました」と告白した瀬木は、自分が本当に「文盲」だったらどんなに幸福だったろうかと語りつつ、同時に、「童心にかえつて、漢字を一つ一つ教わっていた時の愉しさは忘れません」とも記す。死を選ぶ理由については、「生きていることが厭になつたからです。学問に一生を打ち込もうとした人間が、学問を捨てた時の無限地獄を今こそ思い知らされたのです」、「僕はこれ以上の寂寥に堪え得られません」としか語らない。

清張は、この作品でも「女に憑かれた男」と同様に、登場人物が知り得た情報を読者の前で意図的に伏せるという

方法を試みている。語り手は、「それからは、もつと多美子を悲しませることが書いてあつた。手紙は便箋に十五、六枚かいてあつた。一時間も二時間も、或いはもつとかかつて書いたかも知れなかつた」という意味深長な記述をしておきながら、その具体的な内容には言及せず、「多美子は、その手紙のことを、誰にも話しはしなかつた。自分の筆筒の鍵のかかる小抽出しの奥にしまつた。彼女の憂愁も思慕も、一しよにその鍵のかかる中に籠めていた」と語つて場面を閉じるのである。

また、「女に憑かれた男」の「私」が、大学を中退して印刷の職工になつた際、久子が関わっている同人雑誌を読み、彼女の詩を酷評したことが二人を接近させるきっかけになつたのと同様に、「溪流」の場合は、「学会でも注目されている秀才」の瀬木（＝田村）を「不幸な境遇」に育つた「文盲」と勘違いした多美子が一生懸命に読み書きを教えようとすることで二人が親しくなっていくように仕組んでいる。そこには、階層、身分、立場などを越える男女の結びつきというメロドラマの典型的手法がとられている。さきに紹介した「真珠夫人」をはじめとして、日本の近代文学においてそれを最も効果的に演出したのは菊池寛だが、職業作家としてデビューしたばかりの清張は、若かり

し日に愛読した作家の手法を倣うようにしてこの作品を書き上げている。

こうして迎えた「溪流」の最終章は、瀬木（＝田村）が自殺した翌年の早春にこの山溪をひとりの女客が訪れるところからはじまる。「女は二十七、八で色の白い、派手な感じの美しい容貌だった。着物という服装も凝った贅沢なものだったが、洋装の感じを和装に更えたような洗練された新鮮味があつた」という描写が挿入されることで、読者は、それが作品の冒頭で姿を消した女であり、瀬木（＝田村）が恠い焦がれた「奥さん」でもあることを知る。作品中に張りめぐらされた伏線は、ここでようやく最後のピースとなつて嵌め込まれるのである。瀬木が自殺するのは、旅館で働くようになった彼がしばしば訪れていた溪流の「鮎返り」という場所であり、作品内では「溪流の方へは、彼はよく行つた。両方がさし逼つた山峡で、その底に川は流れていた。川には岩石が首を出していて、水は白い泡を見せて奔っていた。田村はその流れに見入つて、二十分でも三十分でも動かなかつた」と描写されている。強い流れに逆らつて川を上つてきた鮎でさえも撥ね返すほどの急流は、「奥さん」との道ならぬ恋に突き進もうとしながら世間の壁に押し返された瀬木（＝田村）の心象風景とも重なつて

いる。

遺書を通して瀬木と「奥さん」の關係を知ってしまった多美子は、まるで密かな復讐を果たすかのように、目の前にいる女と遺書のなかに登場する女を別々の人間として告発し続ける（奥さま）／「奥さん」という微妙な使い分けもなされている）。それは、のちの清張ミステリーにおいて、犯人を追いつめた刑事が犯人の前でその動機を明らかにしていくときの語り口そのものである。逆にいえば、ここの多美子は、瀬木の代行者として、直接的には手を下すことなく「奥さん」を追いつめていくのである。

「田村さんは大学で美学を研究していました。先生からも囑望され、学会からも注目された新進学者だったんで」／と多美子は言つた。眼は川面に吸いついたままだった。／「そんな人がどうして学問を捨てて、自殺までしなければならなかつたか、訳があるんです。奥さまにお話し申し上げますわ、旅の噂話だとお聞き下さいませね」／女客は、黙つたままうなずいた。顔色が悪いのは、水の色 of 反射の故であろうか。／「原因は、女からです。それも、奥さんです」／女客は、一歩、足をひいたようだった。／「その奥さんは、い

わば浮気心からだつたかも知れません。それともはじめは本気で、あとで怖くなつたのかも知れません。どちらにしても、田村さんはその奥さんにくらべれば、五倍も十倍も真剣だつたのです。二人はこつそり家を出ました。奥さんには主人にあたり、田村さんには恩師である先生が、アメリカに旅行している留守の間のことです。二人は、この温泉を並びました。それまでは愉しい旅だつたに違いありません。ところが、運悪く、いえ、世間的に申しますなら、天罰てき面と申しますか、S 駅からここにくる途中で二人の乗っていたバスは事故を起して転落しました。田村さんはひどいけがをしましたが、奥さんは軽い傷だつたようです」

「旅の噂話」としてこの話を聞かされた女客は、あわてて多美子の視線から傷痕のある指を隠そうとする。それを察知した多美子は、さらに相手の心の奥深くを覗きこむように、「世間にぱつと醜聞が知られることの怖さ、安全な家と生活が失われることの恐怖、あらゆるその奥さんの計算が弱い動物のような怯懦な本能となつて遁げ奔らせたのです」、「彼女はひとりで自分の殻の中に逃げ戻つて、ぴたりと蓋をして胸を撫で下しました。ああ、危いところだつた。

よかつたわ、とね」と語る。「私は田村さんの遺書をよんだとき、その奥さんが憎くて憎くて堪りませんでした」とも訴える。そしてついに、片頬に「淋しい微笑」を浮かべながら「あなたは、その田村さんを愛していたのね」と囁く女客に「昂然と眼を挙げ」ながら、「えへ、愛していました」と応える。

そこには、夫の教え子と山間の温泉郷に旅行をするほどの関係になりながら、バス事故に巻き込まれて自分たちの素性が明らかになるのを怖れて保身を図った女への、痛烈な拒絶反応が示されている。愛の言葉を交わすこともなく死んでいった男をいまでも想い、自らの純潔性を誇るかのように「えへ、愛していました」と宣言することによって、多美子は「奥さん」がとつた行動の不誠実さだけでなく、その根底にある倫理の欠落を無言のうちに罵っているのである。

「溪流」という作品は、こうして、戦前・戦中の抑圧された状況のなかで結婚生活を営んできたのちに若い青年との姦通に走つてしまう女の哀れさと、戦後の純潔教育<sup>1</sup>を受けて育ってきたがゆえに男女の関係について潔癖な純愛を貫こうとする女の毅然さをフレームに収めながら幕を閉じる。ただし、のちの清張がこの対立図式において深い慈愛

のもとに凝視するのは、純真無垢な多美子ではなく、言葉少なに「淋しい微笑」を浮べる「奥さん」のような女たちである。傍から見ているだけでは真相に近づくことができない女たちである。清張は、自画像と他画像がまるで違っているにもかかわらず、それをけっして公言しようとしないう女たちにおける欲望の断層を素材として、自らの方法を立ちあげていくのである。

## 四 おわりに

「女に憑かれた男」、「暖流」が掲載された「小説春秋」は、大衆向けの娯楽雑誌であり、作品には戦後のカストリ雑誌や夫婦和合雑誌の流れをくむ愛欲小説が少なくない。実際、「溪流」掲載号の目次タイトルを見ても、柴田錬三郎「叫ぶ女」、池田みち子「未亡人」、石川利光「くずれる女」、戸川幸夫「消えた娘」など、世間の荒波にもまれながら身をもち崩していく女たちに焦点をあてたものが多く、そうした傾向の作品を書いてもいいという要望が編集サイドからあったのであろうと推測できる。当然、作品は通俗的で構成においても文章表現においても粗さが目立つ。だが、職業作家として奮い立っていた清張は、そうした読者への迎合を期待される作品を書くにあたって、自分が関

心をもてる題材を探し、他の作家たちとは違う視点を用意しようとした。

そのひとつが、「女に憑かれた男」における女の愛欲のありようである。占領期にGHQが行った検閲、出版社側の自主規制、チャタレイ裁判などを通じて、昭和二〇年代の文学においては、性描写の猥褻性、あるいは、表現の自由を問題化することが多かった。「座談会『よろめき』時代」（『婦人公論』昭和32年11月）において暉峻康隆が、「戦後のベストセラー小説のほとんどが姦通ものでしょう。『武蔵野夫人』、『鍵』、『挽歌』、それに最近『美徳のよろめき』。『挽歌』にいたったちゃ女房は女房、亭主は亭主、一家総出で姦通している」と発言していることからわかるように<sup>12</sup>、昭和二〇年代後半から三〇年代初頭にかけての文学状況において特に読者の人気を博したのは、姦通する女たちの登場と彼女たちの「よろめき」であり、家庭を棄てること、夫を裏切ることへの躊躇と葛藤だった。倫理を逸脱していく女たちは、自己陶醉と背徳意識のあいだを揺れていた。女を姦通へと促していく行為の主体はつねに男であり、女は男に求められるままに「よろめき」、そんな自分を恥じらわなければならなかった。

だが、「女に憑かれた男」を描いた清張は、女の愛欲を能

動化し、たとえ心中という結末になっても相手を支配し続けようとする「妖婦」のなかにその本質を見いだそうとしている。阿部定という時代の寵児を代理表象するかたちで、人妻（あるいは人妻だった女）の欲情を可視化しようとしている。それが作品の質を高める効果を発揮したかどうかは別として、他の作家とはまったく違う角度から女の愛欲というモチーフに迫ろうとしていることは間違いないだろう。

もうひとつの「溪流」という作品は、「女に憑かれた男」と違って愛欲に関する生々しい描写がほとんどない。そこで模索されているのは、偽名を使って生きることを選んだ男を間に挟むかたちで二人の女を対峙させること、すなわち、姦通する女と純愛を貫こうとする女の対立である。清張は、『婦系図』や『赤と黒』といった古典的名作に題材を借りてその構図を整え、階層、身分、立場といった社会機制を越えることの可能性／不可能性と、二つの価値観が衝突し合うような軌轍を同時に描こうとしたのである。

結果として、「溪流」の世界には、いかにも新派芝居にありそうな偶然とすれ違い、相手を思うがゆえの虚偽、謎めいた登場人物の設定、時間差で知らされる真相などが横行することになるが、清張は、敢えてそうした書割りのな世

界を演出することで通俗というものの本質を見極めようとしているようにも見える。のちに「よろめき」ブームを巻き起こすことになる三島由紀夫の『美徳のよろめき』（群像「昭和32年4月・6月」）よりも早い段階で、清張は、「よろめき」という現象の根底にある欲情の蠢きを捉えようとしていたのである。

## 【注】

1 雑誌「小説春秋」は昭和三〇年二月一〇日に桃園書房が創刊し、同三二年六月一日の第三巻第八号まで合計二二冊が発行された総合文芸誌だが、いずれの図書館、資料館にも完全には保存されておらず、戦後の雑誌出版史からも忘れ去られていた。詳細については拙稿「雑誌「小説春秋」はなぜ歴史に埋没したのか?——附・総目次」（『敍説』Ⅲ—10、平成25年9月）を参照いただきたい。

2 平成二五年七月二四日付の「西日本新聞」が、「北九州市出身の作家、松本清張（一九〇九〜九二）が雑誌に発表したものの、その後顧みられることなく、研究者の間でも存在が知られていなかった短編小説が見つかった。清張が専業作家になって間もない56（昭和31）年に書かれたミステリータッチの短編で、全集、年譜にも未収録で単行本化もされていなかった。／半世紀の時を経て「発見」されたのは、小説「女に憑かれた男」（400字詰め原稿用紙約30枚）。56年6月に刊行された月刊文芸誌「小説春秋」臨時増刊号に掲載されていた。年上の女性と心中を繰り返すが、生き残ってしまった

う男の転落の人生をミステリー風につづり、検事や警察官の尋問と男の供述だけで物語を構成する独特のスタイルを取っている」と報じ、その後、各全国紙も同様の記事を掲載した。松本清張は雑誌「小説春秋」に八作品を掲載しているが、うち六篇は他誌に掲載された作品の再録、単行本化に際して初出が明記されている作品である。郷原宏『松本清張事典決定版』（平成17年4月、角川学芸出版）は、のちに「信玄軍記」と称されることになる短篇シリーズ「炎風」「乱旗」「陣火」の初出を、「小説春秋」56・3・5」としているが、正確には第2巻第1号（昭和31年2月10日発行）、第2巻第2号（昭和31年4月10日発行）、第2巻第3号（昭和31年5月17日発行）である。残る二篇が「女に憑かれた男」と「溪流」で、いずれも全集、単行本等未収録である。記事では「小説春秋」を月刊誌としているが、実際は現在でいうところのムック本のような出版物である。なお、同記事にコメントを寄せた松本常彦は、「女に憑かれた男」が女に言い寄られて二度の心中未遂を起こし、三度目（これは厳密には心中といえないだろうが）に死亡している点に着目し、太宰治との類似性があるとしているが、これは非常に興味深い指摘である。

3 織田作之助は阿部定をモデルとした小説「妖婦」（『風雪』昭和22年3月）を書き、その末尾を「安子のような女はもうまともな結婚は出来そうにないし、といって堅気のままで置けば、いずれ不仕末を仕出かすに違いあるまい。それならばいっそ新太郎の云うように水商売に入れた方がかえって素行も収まるだろう。もともと水

商売をするように生れついた女かも知れない、——そう考えると父親も諦めたのか、「じゃそうしねえ」と、もう強い反抗もしなかった。／安子はやがて新太郎に連れられて横浜へ行き芸者になった。前借金の大半は新太郎がまき上げた。この時安子は十八歳であった。」と締め括っている。

4 予審調書は本来外部に流出するはずのない記録だが、昭和12年には何者かによってそれが持ち出され「艶恨録」として一冊五〇円もの高値をつけていたという（前坂俊之編『阿部定手記』中公文庫・平成10年2月より）。

5 作品中には、死亡通知状の注文が入って急いで版を組み、夜更けに印刷機を回す場面があり、若い頃に小倉市内の高崎印刷所で石版印刷見習工として働いていた頃の経験が随所に活かされている。

6 「箱根心中」および昭和三〇年代に清張が描いた女たちの系譜については、拙稿「悶々とする日々への復讐——清張ミステリーの女たち」（『敍説』Ⅲ—4号、平成21年8月・花書院、のち『高度経済成長期の文学』平成24年2月・ひつじ書房）を参照いただきたい。

7 「溪流」の主人公は、はじめ「青年」とよばれ、旅館では偽名の「田村英夫」と名乗る。素性が明らかにしたあとは多美子の側からは「田村英夫」と呼ばれ、友人からの呼称および遺書を書いた人物として語られるときには「瀬木恭助」と呼ばれる。そこには、ひとりの人間が他者との関係性において様々な顔をもち、分裂した主体であることが企図されている。ただし、初出雑誌の表記には「田村」を「吉田」と記しているところが二カ所あり、誤記がその

まま残ってしまっている。

8 ここで清張が参照していると思われるのは、小説『婦系図』（やまと新聞）明治40年1月1日〜4月28日）というより、それを原作として新派劇や映画で繰り返し製作された「湯島の白梅」（学問の師である酒井俊蔵によって引き裂かれていく早瀬主税とお葛の悲恋に焦点をあてている）に近い。

9 昭和二十九年一月に映画「赤と黒」（監督／クロード・オータ・ラ、配給／東和、完全版192分に対して144分の短縮版）が本国フランスにさががけて世界最初に封切されていることに注目したい。例えば、「印象的な『恋する母』という見出しで映画評を掲載した『読売新聞』（昭和29年12月28日・夕刊）が、「クロード・オータ・ラ」の演出は、前半で、ソレルとレナル夫人の関係をかなり冗長に描く。沈黙の間がジリジリするほど長い。しかし案外、そこが、いくぶん実験的な試みをひそめたネライかもしれない。（中略）後半、ソレルとマチルドの関係が生れるあたりからは、ぐんと映画的印象を深める。ことに、夫と子供の制止をふり切つて、レナル夫人が、かつて自分を殺そうとしたソレルを獄舎へ訪れようとする馬車のシーンなど感動深い。ここには、時代の差も、人種の違いもない。生身の中でもだえる恋した女の美しさのみがある」と評するなど、同作品に関しては人妻が若い男のもとに走る姿に注目が集まっている。

10 昭和二十五年五月二十六日、検察庁はD・H・ロレンス作／伊藤整訳『チャタレイ夫人の恋人上・下』（昭和25年4月20日、5月1日、

小山書店）の押収を指令し、六月には猥褻文書頒布罪（刑法一175条）で発禁処分となった。同年九月一日には出版元の店主・小山久二郎と訳者・伊藤整が起訴され、翌年から始まった裁判では、猥褻の定義、および、言論の自由をめぐる検察側と弁護側の鑑定合戦がなされ世間の注目を集めた。昭和三十三年三月一日、最高裁は上告を棄却し、両者の有罪が確定した。同年四月五日には日本文芸家協会が抗議声明を出している。

11 戦後、文部省が有識者を集めて発足させた純潔教育委員会は昭和24年2月に「純潔教育基本要綱」を発表し、「男女間の道德の低下、青少年の不良化、性病のまんえんは、今や重大な社会問題となり、さらに発展してわれわれ日本人全体の民族的な問題となりつつある」、「将来の健全にして文化の香り高い新国家を建設するためには、純潔教育の適確かつ徹底的な普及によつて根本的にこれを解決する必要がある」と指摘した。同25年4月には純潔教育分科審議会編集で『男女の交際と礼儀』が発行され、学校教育の現場で活用された。

12 この座談会については、菅聡子が「よろめき」と女性読者・丹羽文雄・舟橋聖一・井上靖の中間小説をめぐって（『文学』平成20年3・4月号）で紹介している。直接的な引用はしていないが、本稿をまとめるにあたって同論からは様々な示唆を受けている。

（立教大学文学部教授）